

第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

平成31年2月12日(火)

午後3時から4時30分まで

特別第一会議室(別館9階)

次 第

1 開会

(1) 知事挨拶

2 議事

(1) 第3回静岡県総合教育会議開催結果の報告

(2) 本年度の実践委員会及び総合教育会議の議論を踏まえた意見交換

(3) その他

3 閉会

< 配布資料 >

資料1 第3回静岡県総合教育会議開催結果

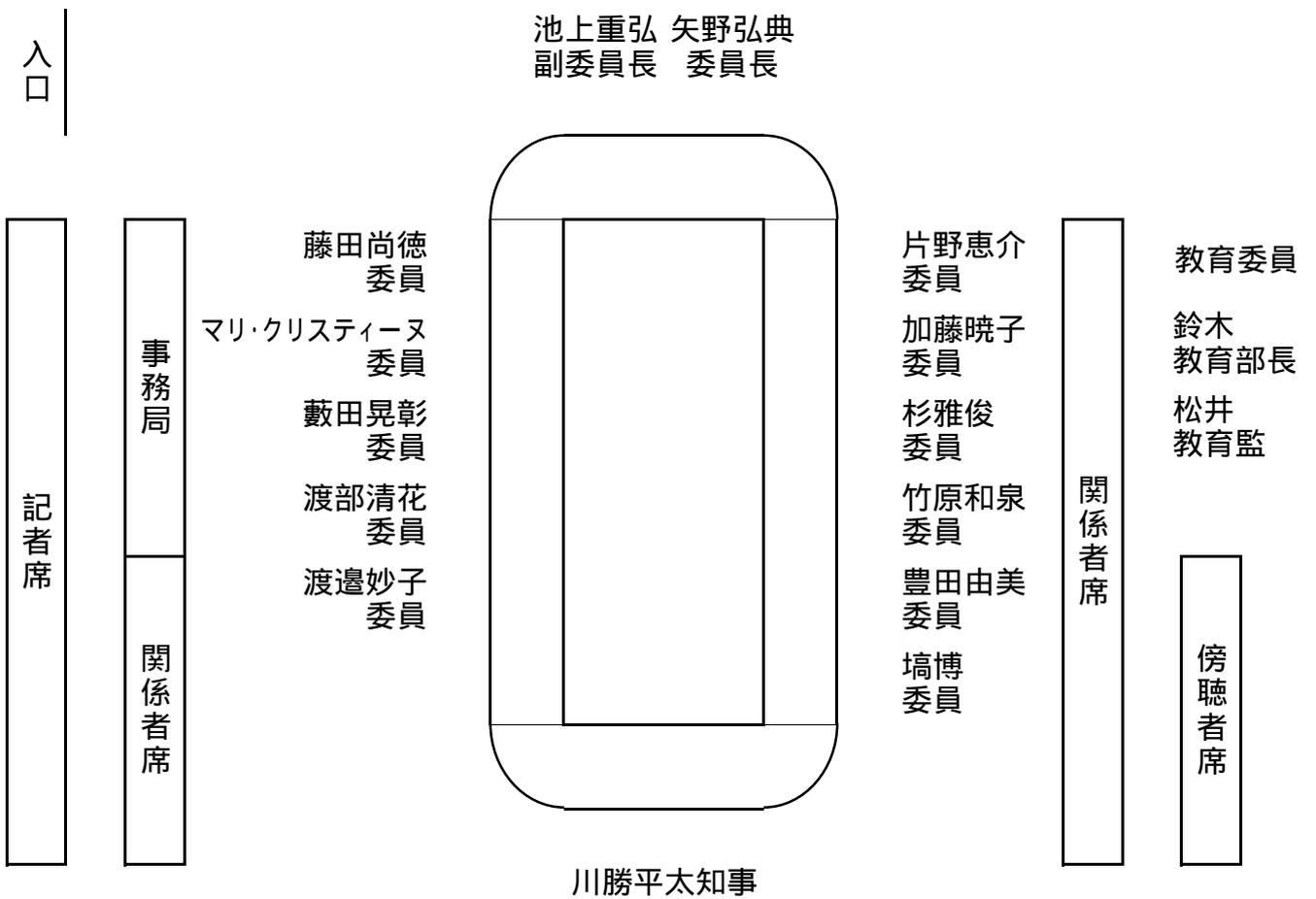
資料2 本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見

資料3 総合教育会議での協議事項への対応状況等

第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 座席表

日時 平成31年2月12日(火)午後3時～

場所 別館9階特別第一会議室



入口

関係者席

渡邊 文化・観光知事 部長
篠原 戦略監
吉林 副知事
池田 健康福祉 部長

地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

(委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏名	役職
やの ひろのり 矢野 弘典 (委員長)	(一社)ふじのくにづくり支援センター理事長
いけがみ しげひろ 池上 重弘	静岡文化芸術大学副学長
かたの けいすけ 片野 恵介	青年農業士
かとう あきこ 加藤 暁子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
きよみや かつゆき 清宮 克幸	ラグビートップリーグヤマハ発動機ジュビロ監督
しらい ちあき 白井 千晶	静岡大学人文社会科学部教授
すぎ まさとし 杉 雅俊	静岡産業大学総合研究所参与
たけはら いずみ 竹原 和泉	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
とよだ ゆみ 豊田 由美	ちやの ^き 生代表
なかみち いくよ 仲道 郁代	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
ばん ひろし 埴 博	藤枝明誠中学校・高等学校校長
ふじた ひさのり 藤田 尚徳	株式会社なすび専務取締役
マリ クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
みやぎ さとし 宮城 聡	(公財)静岡県舞台芸術センター芸術総監督
やぶた てるあき 藪田 晃彰	日光水産株式会社代表取締役社長
やまもと まさくに 山本 昌邦	(一財)静岡県サッカー協会副会長
わたなべ さやか 渡部 清花	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
わたなべ たえこ 渡邊 妙子	(公財)佐野美術館館長

平成30年度 第3回静岡県総合教育会議 開催結果

- 1 開催日時 平成30年11月30日（金）午前10時～正午
- 2 開催場所 静岡県庁別館8階第1会議室A、B、C
- 3 出席者

静岡県知事	川勝 平太
教育長	木苗 直秀
教育委員	斉藤 行雄
	渡邊 靖乃
	藤井 明
	加藤 百合子
	伊東 幸宏
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会	
委員長	矢野 弘典

- 4 議事 社会総がかりで取り組む教育の実現
- 5 出席者発言要旨（抜粋）

出席者から以下のような提案が出された。

< 論点1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進 >

- ・地域ぐるみで教育を推進するために、地域の歴史、文化、芸術、スポーツ、産業などをまとめた「地域教本」を各地域でつくり、座学ではなく、実践や体験する教材として活用するようにしてはどうか。
- ・学校の業務を見直すことに加えて、コミュニティスクールの体制を整えることが重要であるため、県は県内すべての学校に行き届くような専門的な支援をする必要があるのではないか。
- ・コミュニティスクールに関して、家庭と学校以外の居場所づくりのため、PTAや民生委員など既存の仕組みと民間事業者との連携をスムーズにして相互が繋がり合えないか。
- ・社会総がかりの教育として、企業人等が子供と接すると、その大人も成長するので、子供と大人が相互に成長できる仕組みにしていけば、負担感なく取り組めるのではないか。
- ・学校での部活動の文化は重要であり、家庭では体験できない人間同士の関わり合いから得られる喜びや充実感が、子供たちにとって学校が楽しいと思える原動力になっている。また、座学からは学ぶことのできない社会のルール等を教えていくのも部活動の役割の一つである。

- ・スポーツ人材バンクについては、県内の学校数を考えると、登録数は数千人規模まで増やしていく必要があるが、事業費の増加やPR不足による知名度の低さが課題としてある。
- ・スポーツ人材の活用については、学校、家庭、地域で役割分担を明確にすることが大切である。ボランティアではなく、スポーツ指導を職業として成り立つような形にしていかなければならないのではないかと。
- ・スポーツ科学の知見を取り入れて、安全な指導のもと子供の成長のチャンスを活かすため、指導者の資質を向上させる研修の充実が必要である。
- ・留学してグローバル化を進めていくことも大切だが、静岡型ホストファミリー制度を構築し、地域の人も県内にいながらグローバル化を進めていくことが大切である。
- ・歴史、文化、産業など、静岡をもっと理解する学習をとおして、グローバルな人材育成を目指すべきである。

< 論点 2 : 誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進 >

- ・発達障害のある子供を将来的に自立させて社会参加させるために、通級指導教室により子供たちが相互に学べることは大きい。課題は教員不足であり、県単独の財源による人員確保も必要になってくるのではないかと。
- ・発達障害の子供への支援は、高校生にまで広がっている。将来的には、県内東部・中部・西部に各拠点校を開設し、巡回通級の全県展開や専門性を高める教員研修の充実も図っていく必要があるのではないかと。
- ・不登校や障害のある子などを特別視せず、一人の人間として接することが大切である。子供に居場所をつくり、本物に触れさせる機会をつくるなど、教える側もゆとりを持ってきめ細かい指導を行う必要がある。
- ・努力をしたくなるような環境づくりをすることが教育の原点ではないかと。どのように子供の内側からモチベーションを引き出すかが大切である。
- ・「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」の意味として、自分が得意な分野で生きていくことを決めた子供の才能を伸ばしていく教育、環境づくりも大切であると考えている。
- ・目で読んで頭で理解する読書に、音を出して耳で聞くことを加える音読は情操教育には最適な教育である。古典に限らず絵画・音楽・芝居等、本物に触れることで、子供たちに新しい芽が出て啓発される。
- ・SPACの俳優による発声練習を取り入れるなど、静岡の資源を大いに活用した音読のやり方を考えてみてはどうか。また、地域の伝統ある祭り等へ子供たちを参加させることも情操教育の一環となる。

6 知事総括

- ・各委員から出た意見については、具現化できるものは速やかに実行していく。今日の議論が無駄にならないようにしていきたい。

本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見

「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）（関係資料 P7～12）

<p>実践委員会の 主な意見 (5月8日)</p>	<p>(1) 目標に向けた努力や資格の勉強等も学習であり、子供が目標を自発的に見つけ、周りがサポートする体制づくりが必要。</p> <p>(2) 大学や自治体と連携し、生徒がイメージしやすい当事者性を持てるテーマで、継続的なワークショップを行うのは有意義。</p> <p>(3) 子供たちが学校にいる時間をいかに有意義に使うかを議論すべき。一方、教員は、塾に通う子供の学力状況を把握し、同じアプローチを避けるなど授業改善に繋げることが必要。</p> <p>(4) 子供たちのグローバル化の推進には、自国の歴史や自分の地域を学び、自己を見直すきっかけを与えることが大切。</p> <p>(5) 日本の教育が蓄積してきたものや日本語で鍛えた思考力に自信を持つべき。一方で、今の日本の教育のどこが良くないのか、問題の本質を分析して精査することが必要。</p> <p>(6) スカイプ等のICTを活用し、クラス単位で海外の高校生と交流させることで、国際化の一翼を担うことが可能。</p> <p>(7) 教員のICT活用能力育成のために、学校内の支援体制づくりや民間人、大学生との連携、ICT支援員の養成が必要。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (6月7日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コアスクールの取組により、中長期的な視点で適切な中間評価や修正を行い、新しい魅力ある学校をつくるのが大切。 ・知識、技能は自宅で学習し、学校ではディスカッションをするなど、学校でできること、やるべきことを厳選すべき。 ・基礎学力習得に人工知能(AI)を有効利用し、知性を高める学習に時間を割き、教員の時間的・精神的余裕を生み出すべき。 ・子供たちがICTを活用して学ぶことよりも、教師の事務的負担を軽減するために学校事務で活用する方が優先。 ・ICTを全授業で使う必要はなく、特定の単元で実際に体験できないことをバーチャルで可視化し、使用するのが有効。 ・ICT分野の人材バンクをつくり、シニア人材、学生等の専門性のある適切な人材を登録し、支援してもらうべき。

「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）（関係資料 P13～17）

<p>実践委員会の 主な意見 (7月19日)</p>	<p>(1) RWC2019 の開催に合わせ、各国のラグビーの歴史等を織り交ぜた独自の教科書を作り、小中学校で授業ができないか。</p> <p>(2) ラグビーに限らず、演劇、サッカー等でも同様に展開できる。教員の研修を含めた静岡モデルを構築できればよい。</p> <p>(3) 親の子供への後押しや、才能を見抜ける指導者の育成に加え、子供たちが多様な体験をできる環境の整備が必要。</p> <p>(4) 女子のスポーツは、地域人材を活かし、地域の部活動で実施するなど、継続して活動できる環境を整えることが必要。</p> <p>(5) 世界各国の食文化と関連させるなどして、子供たちに異文化への興味を持たせてはどうか。</p> <p>(6) 来日した外国人と子供たちとの交流の場として、パブリックスペースであるお寺を宿泊場所として活用できないか。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (9月5日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な実学に接し、自ら気づき感じる機会を提供するために、毎年度一つ対象を選び、授業で教える仕組みがあってもよい。 ・ ラグビーの授業による先生の負担増が心配。子供たちに興味関心の入口を提供するのは学校だが、教えるのは外部の役割。授業は、小学5年、中学1・2年を対象に、各学校の選択制とし、学校現場に無理のない形で進めてはどうか。 ・ 子供たちが、部活動ではなく学校外で活動できる体制づくりを進めなければ、普及活動の効果が薄れてしまう。 ・ 美を楽しむ手本となる大人がいないので、大人を含め、芸術を楽しむ機会をつくるべき。 ・ 教員が異文化に対する抵抗感を無くし、子供たちが「相手を考える」、「伝え合う」ことを身に付ける教育を目指すべき。 ・ 子供たちが異文化に接する機会を多くつくる工夫が大切。地域の外国人や企業の人材が教壇に立ってもよい。 ・ 子供たちが外国人に日本の文化を伝える場や、日本語で交流する場を設定するのもよい。 ・ ホストファミリーとして外国人を受け入れるなど、学校だけではなく、地域ぐるみで迎え、交流を深めるべき。

学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進（関係資料 P18～21）

<p>実践委員会の 主な意見 (10月15日) (11月16日)</p>	<p>(1) 本県の教育理念である『「有徳の人」の育成』をより具体化した言葉として、「才徳兼備」という言葉が適切。</p> <p>(2) 高校2、3年生を県内の大学で聴講生として受け入れ、単位を認めるなど、才能を伸ばす扉をたくさん作ることが必要。</p> <p>(3) ボランティアや旅行等、様々な経験を単位化するなど、座学では学べないことを体験することが重要。</p> <p>(4) 学校運営協議会と地域学校協働本部が常に協議し、実行していくサイクルをつくる必要がある。</p> <p>(5) 地域コーディネーターと連携して人材を探し、繋がりを持つことで、子供たちにより実りある学びの機会がとれる。</p> <p>(6) 地域バランスを考えながら、17歳で世界やプロで活躍する子供を輩出する県独自のスポーツ学科をつくってはどうか。</p> <p>(7) スポーツ人材バンクの登録者数を増やすため、指導者のロールモデルを示すなど、制度の周知に取り組むことが必要。</p> <p>(8) 中学生の能力を引き出せる指導者養成が必要。指導者の専門性を高める研修やタレント発掘と育成等を行ってはどうか。</p> <p>(9) ホストファミリーの負担を減らすよう工夫し、外国人留学生等を受け入れる家庭の登録制度を検討すべき。</p> <p>(10) アジアから日本への留学希望は多いので、例えば1市町が1家庭ずつ、毎年受け入れるような仕組みがあればよい。</p>
<p>総合教育会議 における 主な意見 (11月30日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の歴史、文化等をまとめた「地域教本」を各地域で作し、座学ではなく、実践や体験の教材として活用してはどうか。 ・学校業務の見直しに加え、県内の全学校に専門的な支援を行い、コミュニティスクールの体制を整えることが重要。 ・家庭と学校以外の居場所づくりのため、PTA、民生委員等の既存の仕組みと民間事業者がスムーズに連携できないか。 ・部活動の人間関係から得られる喜びや充実感が、学校が楽しいと思える原動力になるほか、座学では学ぶことのできない社会のルール等を教えるのも部活動の役割の一つ。 ・県内の学校数を考えると、スポーツ人材バンクの登録数を増やす必要があるが、事業費の増加や知名度の低さが課題。 ・学校、家庭、地域で役割分担を明確にし、スポーツの指導が職業として成り立つ形にしなければならない。 ・子供の成長のチャンスを活かすため、スポーツ科学の知見を取り入れ、指導者の資質を向上させる研修の充実が必要。 ・留学は大切だが、静岡型ホストファミリー制度を構築し、地域の人にも県内にいながらグローバル化を進めることが大切。 ・歴史、文化、産業など、静岡をもっと理解する学習をとおして、グローバルな人材育成を目指すべきである。

誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進（関係資料 P22～26）

<p>実践委員会の 主な意見 (10月15日) (11月16日)</p>	<ol style="list-style-type: none"> (1) 「未来を切り拓く Dream 授業」のように、自分の得意なことや好きなことを気付かせてあげる教育が大切。 (2) 小さい頃からハンディキャップをどう捉えるかを学ぶことが大事であり、障害を個性として受け入れる寛容な心を醸成する教育環境をつくるのが大切。 (3) 経済格差が学力格差に繋がると感じているので、貧困層の子供たちにも目を向け、社会全体で対応することが必要。 (4) 美術教育は感性の教育である。日本の工芸・美や歴史を研究熱心な人は勉強家で経済力もあり、非常に礼儀正しい。 (5) 所得の多寡にかかわらず、芸術に限らずあらゆる文化にアクセスできる機会を平等に整えるべき。 (6) 子供たちの思いやりの心を育むために、実体験を伴うカリキュラムや手法を学校や家庭に提供できないか。 (7) 会津若松市や福島県のように、子供たちがとるべき行動 5～7項目を公募して作成してはどうか。 (8) 子供の頃から、音読によるコミュニケーションを図ることで、言葉の意味や大切さを知っていくことは貴重な経験であり、より多くの学校で採り入れて欲しい。
<p>総合教育会議 における 主な意見 (11月30日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発達障害のある子供を将来的に自立させ、社会参加させるために、通級指導教室で子供たちが相互に学べることは大きい。教員不足が課題であり、県単独の財源による人員確保も必要。 ・発達障害の子供への支援は、高校生にまで広がっており、将来的には、県内東中西部に各拠点校を開設し、巡回通級の全県展開や専門性を高める教員研修の充実が必要。 ・不登校や障害のある子などを特別視せず、一人の人間として接することが大切。子供に居場所をつくり、本物に触れる機会をつくるなど、教える側もゆとりを持ちきめ細かい指導が必要。 ・努力したくなるような環境づくりが教育の原点であり、どのように子供の内側からモチベーションを引き出すかが大切。 ・自分が得意な分野で生きていくことを決めた子供の才能を伸ばしていく教育、環境づくりも大切。 ・目で読んで頭で理解する読書に、音を出して耳で聞くことを加える音読は、情操教育に最適。古典に限らず絵画・音楽・芝居等、本物に触れることで、子供たちに新しい芽が出る。 ・SPACの俳優による発声練習を取り入れるなど、静岡の資源を活用した音読のやり方を考えてはどうか。地域の伝統ある祭り等へ子供たちを参加させることも情操教育の一環。

「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）に関する論点

子供たちの資質・能力を伸長するためには、子供たちに基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことが必要である。

特に、子供たちが主体的に学習に取り組み、学習を習慣付けるためには、大学や地元自治体等と連携した授業の実施や、タブレット端末や提示用デジタル機器等のICTの活用等を通じて、子供たちの興味や関心を引き出す取組が必要である。

確かな学力...基礎的・基本的な知識や技能に加えて、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めた幅広い学力

論点1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組

（高校段階）

・高大接続改革等に対応し、子供たちの学習意欲を高め、社会で役立つ確かな学力を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

（小学校・中学校段階）

・子供たちが自ら学びたいという意欲を持ち、理解の質の向上や知識・学習習慣の更なる定着を図るために、具体的にどのような取組が考えられるか。

論点2：学力向上に向けたICTの効果的な活用

子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、授業等においてICTを活用することが効果的であるが、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会の意見の総括

< 論点 1 : 大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組 >

- ・学習とは、学校の宿題や予習に限られるものではなく、将来の目標のために努力することや、必要な資格を取得するための勉強も含まれる。子供が目標を自発的に見つけて、周りがサポートしていく体制づくりが必要である。
- ・大学や地元自治体と連携して、中学生や高校生が比較的イメージしやすいテーマ、あるいは当事者性を持って考えられるテーマで継続的なワークショップを行う取組は有意義である。また、高校生に一年間テーマを持たせて研究できるようにするなど、教員が時間に縛られず、余裕と自信を持って授業ができるようになると良い。
- ・学校教育が不足しているから子供たちは塾に行く。学校教育を充実させ宿題を無くせるよう、子供たちが学校にいる時間をいかに有意義に使うかを議論するべきである。一方、教員は塾に通う子供の学力状況を把握し、同じアプローチを避けるなど授業改善に繋げることが必要である。
- ・子供たちのグローバル化の推進には、自国の歴史や自分たちの住む地域を学び、自己を見直すきっかけを与えることが大切である。
- ・これまで強みとして日本の教育が蓄積してきたもの、日本語で鍛えた思考力というものに自信を持つべきである。一方で、なぜ今の教育がだめだと言われるようになったのか、日本の教育のどこが良くないのか、問題の本質を分析して精査する必要がある。

< 論点 2 : 学力向上に向けた I C T の効果的な活用 >

- ・スカイプなど、I C T を活用してクラス単位で海外の高校生と交流させることで、国際化の一翼を担うことができる。
- ・教師の I C T 活用能力を育成するためには、学校内に必要な知識や技術を習得できる支援体制づくりや、I C T を活用できる民間人及び大学生との連携、I C T 支援員の養成が必要である。

「知性を高める学習」の充実に関する実践委員会の意見

論点1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組

学力・学習状況の実態について

高校生の勉強に対する意欲など、現実をしっかりと分析しなければ学力向上の答えが出てこない。(矢野委員長)

データの取り方と目指すところの齟齬を感じる。思考力・判断力・表現力や主体的に協働して学ぶことが大切としておきながら、小学校、中学校の学力の目安がテストの点数で表すと、そこでは測りきれない部分をどのように捉えて施策に盛り込んでいくのか。本当の学力をどのように培っていくのか、データの取り方・考え方を議論すべき。(仲道委員)

狭義の学習時間のデータとともに、幅広に「知性を磨くことにあなたは何を努力していますか」と問うと数字は変わってくる。ゲームもコンピューター能力を高めるという視点では学習に当てはまるかもしれない。(杉委員)

“勉強”というのは、学校の宿題や予習に限られるものではなく、例えば将来スポーツ選手を目指す人なら部活で努力をすることや、将来必要な資格を取得するための勉強も家庭学習になるのではないか。子供が自発的に見つけて、それを周りがサポートしていく体制が必要である。(豊田委員)

県内の学力を調べるにあたり、県全体でまとめるのではなく、例えば、東・中・西の3ブロックに分ける、あるいは地域を細かく分けるなど、地域ごとに結果をまとめ、それを改善に繋げられないか。(片野委員)

授業改善について

〔高校段階〕

大学や地元自治体と連携した取組をすることで高校の学びを豊かにすることができる。例えば、行政が多文化共生や男女共同参画など、中学生・高校生が比較的イメージしやすい分野のプランをつくる際に、ワークショップを継続的に行うという取組は有意義だった。また、NIE(ニュース・イン・エデュケーション)を活用して、中学生や高校生が当事者性を持って考えられるテーマに取り組んでみるというのも一つの方法である。(池上副委員長)

教員が時間に縛られず、余裕と自信を持って授業ができるようになると良い。例えば、高校生でも一年間テーマを決めて研究させるような取組ができれば良い。(加藤委員)

大学入試で思考力を問う問題を出さなければ思考力を養うことはできない。ただ、一般教養の部分での暗記させることは大切である。問題は暗記と思考力のバランスである。(加藤委員)

〔小学校・中学校段階〕

芸術教育は、アクティブラーニングに対して非常に有効な手段である。音楽や演劇などをどのように学校教育に入れていくのか、特に小学校段階で議論すると良い。(仲道委員)

〔共通〕

時間をどう使うか。企業でいう残業が子供たちの宿題に当たる。学校教育で足りないものを家庭で補うということを、今はどこの県でもやっている。それを静岡県はなくす宣言をする準備をしてはどうか。子供たちが学校にいる時間をいかに使うかを徹底的に議論するべき。(清宮委員)

学校教育が不足しているから子供たちは塾に行く。学校教育が充実していたら塾に行く必要がない。学校教育のあり方を反省するということは必要である。(矢野委員長)

周囲を見ていると、小・中・高と学年が上がるにつれて、学習塾や予備校に行く割合がクラスの中で増えていった。塾が予習や復習をやるから授業へのモチベーションは下がるのではないか。教員側に生徒個々の学習背景が見えてくると、塾で学習した内容や教え方を避け、学んだことを活用したグループワークを行うなど、授業内容を工夫することに繋がるのではないか。(渡部委員)

訓練によって人間の思考というのは鍛えられる。やはり論理的思考力を習得するためには文章を書くことが重要である。(埴委員)

グローバル教育について

外国人を接客する中で感じたこととして、文法を習うとかではなくてコミュニケーションがとれるグローバル人材の育成を幼少期から実施しても良いのではないか。(豊田委員)

世界の大学ランキングでは日本の大学ランクは低い。自分が関わっている高校生の例では、東大や京大に進学せず、海外の大学に進学するケースが増えている。日本の高校生の留学者の人数、海外からの留学生の受け入れ人数、海外大学への進学者数などの調査もあると良い。(加藤委員)

留学生が日本の文化や歴史を勉強して、それに周りの日本人生徒が触発されて自分たちの住む地域を勉強していく。グローバル化が自己を見直すきっかけになる。(埴委員)

日本の子供たちが日本の歴史について知らないというのは、本当に良くないことである。県全体で歴史教育をしっかりと行うことが大切である。(加藤委員)

脳内で一つの言語でしか思考力は鍛えられないとした場合、その思考力が養われていないのに、ツールとしての語学を獲得して何になるということがある。(宮城委員)

日本の教育に関する意見

日本の近代化が成し遂げられたのは、別に外国語が得意だったからではない。今までの日本の教育が蓄積してきたもの、日本語で鍛えた思考力というものにも自信を持つべきである。(宮城委員)

今、弱点だと言われている思考力や語学力の不足への指摘は、別に昨日、今日始まったわけではない。それをむしろ強みとしてやってきた時代があった。なぜ、今そんなにだめだ、だめだと言われるようになっているのか。日本の教育のどこが良くないのか、問題の本質を分析して精査する必要がある。(宮城委員)

日本で教育を受けさせたいとアジア各国の方々から言われている。それは挨拶や礼儀など道徳心を学ぶことができるからである。また、日本人の一番いいところは、聞く耳を持っている、あるいは聞く能力があるということ。これは100年なり200年の教育の賜物である。(加藤委員)

その他の意見等

「知性を高める」ことは「人間力を高める」「教養を豊かにする」ことと同じことと捉えた場合、教養とは何であるか。教養を培う家庭環境や熱意が薄くなっている今、公共の教育機関は教養をどう考えるのかということは非常に大切である。(仲道委員)

最近の小・中学生の保護者の話を聞いていると、自分の子供を自分の所有物のように捉えている親が多い。学校や先生にいろいろな話を持っていくことが非常に多い。子供たちの知性を高める前に、保護者や家庭の関わり方や考え方もテーマとして取り上げて、双方を高めていかないといけないのではないか。(豊田委員)

論点2：学力向上に向けたICTの効果的な活用

ICTを活用した取組について

スカイプでアジアの高校と繋がり、共通言語を英語にして、一つのテーマのもと皆でディスカッションを行ってはどうか。日本の高校生のディスカッション能力は他のアジアの国と比べ低いので、ICTを活用してクラス単位で海外の高校生と交流させることで国際化の一翼を担うことができる。(加藤委員)

教師のICT活用能力の育成について

ICT活用事例の中で、世界と繋がっている様子が無いのは、教員に世界の仲間と繋がる発想が無いからである。こうした実態を踏まえ、ICTをどう使うかといった視点で教員を育成しなければならない。(池上副委員長)

転任してきた先生がICT活用を不得意とする場合、学校内の推進委員会が責任を持って先生を教育する体制を持つ学校がある。教材づくりやプレゼンテーション時に、学校が必要な能力や知識を指導し、経験を積ませることは大切であり、県を挙げて実施すると良い。(矢野委員長)

ICT支援員を活用することによって、教員がICTを使って思うことを実現させることができる。静岡県は支援員の養成と、支援員のリース代を支援できると良い。授業内容をICTにどう繋げるか分からない時に、支援員が入ることで良いものができる。このICT支援員資格というところに目を向けて欲しい。(杉委員)

富士山のある静岡県は世界の人たちと繋がりやすいメリットがある。教員が世界と繋がるためにどう活用したら良いか、静岡県出身の起業家や大学生等、若い世代の人たちを活用すると良い。(加藤委員)

ICT活用に対するその他の意見

スマホを使ってコミュニケーションをとっているが、相手と直接話をしている訳ではない。近ごろの人たちは人間関係づくりが下手だというようなことが言われている。それが実はダメージが大きい。どうやって調和をとっていくかが大きな課題である。(矢野委員長)

若者はコミュニケーションが苦手ではなく、現代はコミュニケーションのやり方、それによるスピード感が変わってきている。世代間でそれぞれコミュニケーションがとれていないと思いがちだが、お互いリスペクトしながら補完し合うと良い。(渡部委員)

「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）に関する論点

静岡県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、「知性を高める学習」（英数国理社等）だけでなく、小さな頃から「技芸を磨く実学」（農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等）に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がある。

特に、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムの開催を目前に控え、県民のスポーツや文化芸術に対する関心が高まる中、子供たちの興味を深め、能力を更に伸ばす仕組みづくりが重要である。

論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

国際イベントの開催を一過性のものとすることなく、これを契機として、子供たちのスポーツ・文化芸術活動を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

論点2：異文化交流の促進

国際イベントは、単にそのイベントを観る、あるいは参加するだけでなく、世界の文化に触れる絶好の機会である。この機会に、子供たちの異文化交流を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会の意見の総括

< 論点 1 : 子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進 >

- ・ラグビーワールドカップ 2019 の開催に合わせ、提案をしたい。小中学生を対象に、各国のラグビーの歴史などを織り交ぜた静岡県独自の教科書をつくり、座学で来年 4 ~ 7 月までに各月 1 回程度授業の実施ができるか。チケットを用意して、子供たちがエコパでの試合を観戦できるようにしたい。女子ラグビーチームの立ち上げを考えている。
- ・提案された授業は「総合的な学習の時間」の活用が考えられ、座学であれば運動の苦手な子供たちも興味を持てる。教科書がラグビーの予備知識や各国の食文化の紹介、健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点から総合的な教材となればワールドカップを楽しむ広がりが出てくるのではないか。
- ・ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも同様に展開できる。教師の研修を含めた静岡モデルを構築するとよい。
- ・多様な体型の人がチームにいて成り立っているラグビーをとおして、組織運営や集団生活で活用できる考え方や、ラグビーの持つ思想を教育現場で広めていくとよい。
- ・文化・芸術・スポーツなどに限らず、将来の進む道を 10 代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の育成に加え、子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。
- ・サッカーをはじめ、女子のスポーツチームに関しては、地域のトップ人材を活かし、継続して活動できる環境を整えていく必要がある。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。

< 論点 2 : 異文化交流の促進 >

- ・国際イベントの開催により、世界各国から外国人が来日するので、各国の食文化と関連させるなどして、子供たちに異文化について興味を持たせるとよく、それが日本の文化を昇華・発展させていくことに繋がる。
- ・来日した外国人と子供たちとの交流の場として、パブリックスペースであるお寺を宿泊場所として活用できないか。

「技芸を磨く実学」の奨励に関する実践委員会の意見

論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

ラグビーワールドカップ2019に関連した取組の提案（清宮委員）

〔座学授業〕

本県開催の盛り上がり、開催後のレガシーに繋げるため、小中学生を対象に、座学でラグビーの授業を実施できないか。

（教材づくり）

ラグビーワールドカップの概要に加え、ラグビーの歴史や成り立ち、各国でラグビーがどのように扱われてきたのか、などを織り交ぜた教科書をつくりたい。対象となる県内全ての子供たちに教科書を配ることで、ラグビーに関心を持っていない層へ働きかけていくことが大切である。静岡県独自の教材をつくることで、他の開催県に波及させたい。

（授業展開）

普段子供たちと接している担任の先生がラグビーの授業を行う。その際、教師が教える内容を教科書からそれぞれ選び、4～7月くらいで各月1回程度実施してもらいたい。座学授業により興味を高めた後にヤマハララグビー部員が小学校に行き、子供たちと触れ合いながら大会本番を迎える。

〔ワールドカップ観戦〕

できたら観戦チケットを用意して、子供たちが観戦できるところまで持っていければベストである。

〔女子ラグビーチームの立ち上げ〕

本県のワールドカップレガシーとして女子ラグビーチームを立ち上げることを考えている。女子中高生が、これまで経験したスポーツから競技転向する際に、ラグビーはベストスポーツである。

上記提案に対する各委員からの意見

ルールを教えたり、実際に体を動かしたりするだけでなく、栄養に関する知識や健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点からどんな人でも楽しめるような総合的な教材ができれば面白い。（白井委員）

単なる体験活動ではなく、農業で言えばミツバチが重要な役割を果たしているなど、子供たちにとって身近な話題で伝えていくアプローチは興味を持って聞いてもらえるのでよい。（豊田委員）

小学校においては、ラグビーという明確なテーマを設定できるので、「総合的な学習の時間」であれば実施できる可能性が高くなるのではないかと。(豊田委員)

座学でラグビーを教える発想が良い。クラスには運動が苦手な子供が半数近くいるので、そうした子供にもラグビーの歴史や楽しく観るための予備知識を教えることでワールドカップを楽しむ広がりが出てくる。(宮城委員)

副読本をつくり、モデルを示して教師の研修を体系的に行う必要がある。研修も含めた静岡モデルを構築するとよい。(池上副委員長)

教科書の中でそれぞれの国を紹介する際に、その国におけるラグビーの発展と植民地支配との関係性を子供たちが頭に描きやすくつくって欲しい。また、多様な体型の人がチームにいて成り立っているスポーツであることから、ラグビーを組織運営のアナロジーとして学べるようにするとよい。(池上副委員長)

ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも展開できる。今回はタイミングとしてラグビーから始めていくのはよい。(豊田委員)

企業経営とラグビーは似ている。新しい仕事を後ろにパスして前に進み陣地を取る。授業をとおしてラグビーから学べること、背景や共通点を同時に教えてあげられるよい機会となる。(藤田委員)

経営者として組織をまとめ、部下を指導するという点では、ラグビーの持つ思想は非常に素晴らしい。「One For All, All For One」を小中学生の教育現場で広めていくとよい。(矢野委員長)

指導者養成や環境整備に関する意見

教育に対して熱心で、スポーツの本質を知った上で、競技指導をとおして人間教育ができる指導者が少ない。今回作成する教科書を使って指導できる人材を育てることが大切である。(渡邊委員)

将来の進む道を10代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の存在は必要不可欠である。そうした環境整備について、行政や教育現場の取組は必要である。(豊田委員)

文化・芸術・スポーツなどに限らず、他の模範となる静岡モデルを構築して子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。スポーツをとおして、子供たちが達成感や失望感などを体験し、自らの心を成長させることが大切である。(山本委員)

教える側が専門家でなくても、子供たちに関心を持てる場を与えれば、子供は反応して成長していく。足りない部分は学校で個別にサポートしていけばよい。(埴委員)

女子の部活動(地域部活)に関する意見

女子チームに関して、例えばサッカーでは小学校までは女子は男子とともに活動するため登録者数が多いが、中学校では部活がないため登録者数が激減する。地域のトップ人材を活かし、継続して女子が活動できる環境を整えていく必要がある。(山本委員)

地域部活について、女子サッカーでも始めたい。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。(山本委員)

その他の意見等

サッカー部をはじめ運動部では、挨拶や立ち振る舞いなどがきちんとでき、問題行動が激減した。また、一年をとおして地域清掃や子供たちにスポーツを教えるなどのボランティア活動を行っており、学校の中だけでなく地域に拡大している。(埴委員)

スポーツ・文化芸術活動のアンケート結果について、それぞれ男女別で詳しくデータを出すことで、その種目や分野での適切な対応や環境の整え方が変わってくるのではないか。(マリ委員)

論点2：異文化交流の促進

国際イベント等を契機とした異文化交流に関する意見

ワールドカップでは、選手のみならず世界各国から多くの外国人が来日するので、各国の食文化と関連させて子供たちに異文化について興味を持たせるとよい。(豊田委員)

静岡県と交流の深いモンゴルをはじめとする国々の異文化を知るためには、食文化やスポーツ等からのアプローチによる調べ学習をもっと充実させるべきである。国際イベントを契機に異文化に触れることが、日本の文化を昇華・発展させていくツールになる。(片野委員)

国際イベントで来日した外国人がお寺に宿泊できないか。外国人にとってはプレミアムな体験になるに違いない。ホテルでの宿泊とは違い、パブリックスペースであるお寺は、地域の子供たちとの交流の場として活用できるのではないか。(池上副委員長)

社会総がかりで取り組む教育の実現に関する論点

子供たちの教育は、学校の先生だけに任せるのではなく、「地域の子供は地域の大人が育てる」という決意の下、取り組むことが重要である。

特に学校においては、社会の変化に柔軟に対応し、地域住民や保護者からの理解と参画を得ながら、子供たちの学びを支える地域に根ざした学校づくりを推進することが必要である。

また、自らの能力を最大限に伸ばす機会は、等しく与えられるべきであり、個々のニーズに応じた教育の充実等、夢や希望を持って社会の担い手となる教育を推進することが必要である。

これらの取組により、「才徳兼備」の人材を育む教育を社会総がかりで推進していく必要がある。

論点1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進

多様化する児童生徒の実態や社会の実情・ニーズに柔軟に対応した地域に根ざした魅力ある学校づくりを進めるために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・地域学校協働本部やコミュニティスクール等、地域と学校の連携・協働の推進
- ・教職員と子供が向き合う時間の拡充
- ・地域の実情等を踏まえた魅力ある高等学校の実現

論点2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が生まれ育った環境や経済的理由に左右されず、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

- ・障害のある人、外国人等を始めとするマイノリティとの共生意識の醸成及びいじめ、貧困等に対する相談支援体制の構築
- ・特別支援教育の充実(障害のある児童・生徒一人一人のニーズに対応した指導と切れ目ない支援体制の構築)
- ・道徳教育を始めとする豊かな情操を育む教育の推進
- ・社会参画に向けた教育・支援の充実(消費者教育など)

実践委員会の意見の総括

<才徳兼備に関する意見>

- ・本県の教育理念である『「有徳の人」の育成』をより具体化した言葉として、「才徳兼備」という言葉が適切ではないか。子供たちが「徳」を身に付けるためには、世界を知る、歴史を振り返る、未来を見据えることで「自分は何者なのか」という自己認識を打ち立てることが大切である。
- ・得意なことや好きなことを気付かせてあげられる教育が大切であり、自分の言葉で議論や説明ができる人材が社会に求められている。そうした人材を育成する機会として、県が取り組む「未来を切り拓く Dream 授業」は、本人や保護者の事後アンケート結果からも効果の高い事業である。
- ・高校2、3年生を県内の大学で聴講生として受け入れて、単位を認めるシステムなど、生徒の才能を伸ばすことができるような扉をたくさん作ることで、生徒たちが大学を選ぶ時にその大学に進学しやすくなるのではないか。また、大学側にも年齢、組織、立場を超えて受け入れる環境が必要である。

<論点1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進>

(地域学校協働本部やコミュニティスクールの導入)

- ・学校運営協議会と地域学校協働本部の両方が常に協議をして実行していくサイクルをつくる必要がある。地域学校協働本部の設置やコミュニティスクール等の制度は、これまであった地域全体で人をつくるという文化を仕組みにしたことであり、うまく機能するとむしろ学校側の負担感が減る。課題は、学校のマネジメントに合った動きができる委員を選定することである。

(地域と学校との連携)

- ・子供たちも社会の一員という視点から、現代社会が直面している問題点を学ばせることで、社会貢献や人助けの意識が芽生える。また、ボランティアや旅行など、様々な経験を単位にできるようにするなど、座学では学べないことを社会に出て体験することが重要である。なお、県が進めている「社会総がかりで取り組む教育」を、様々な機会を活用して広く伝え、多くの県民に教育に関わってもらおうようにしていくのがよい。

(魅力ある高等学校の実現)

- ・スポーツ学科の設置では、自宅通学とした場合、トレーニングと栄養、休養面における親の関わり方の観点から、県内の地域バランスが重要である。世界レベルの施設を揃えて17歳で世界やプロで活躍できる子供を輩出できる静岡県独自のものをつくってはどうか。

(専門知識を有する人材の活用)

- ・地域コーディネーターと連携して地域の人材を探し、繋がりを持つことで、子供たちにより実りある学びの機会をつくっていいのではないか。コーディネーターは教師のパートナーとして協働的に教育に関わるマインドが必要である。また、学校現場の様々な需要に応えられるよう外部の人材バンクの活用も考えられる。

(スポーツ人材バンクの充実)

- ・スポーツ人材バンクの登録者数を増やすため、登録基準の見直しや既に活躍している指導者のロールモデル、好事例をホームページやパンフレット等で示すなど、制度の周知に取り組む必要があるのではないか。
- ・子供の能力を最大限に引き出せる指導者がよい指導者である観点から、スポーツでは、中学期(13~15歳)の子供たちの能力を引き出せる指導者養成が必要である。中学校部活をレベルアップさせていくために、専門性を高めることができる研修などを導入するなど、中学生のタレント発掘と育成、それを維持する仕組みをモデル校などで行なってはどうか。

(静岡型ホストファミリー制度の構築)

- ・年間の節目の行事の際や日常の買い物や食事などのみ受け入れるような形で、ホストファミリーの負担を減らし、外国人留学生等を受け入れることができる家庭の登録制度を考えてみてはどうか。
- ・アジア各国から日本へ農業・工業・芸術など様々な分野で留学希望が多く、本県には特色のある学校が多くあるので、例えば1市、1町、1家庭ずつ毎年受け入れていくような制度や仕組みがあればさらによい。

<論点2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進>

(マイノリティとの共生意識の醸成と貧困世帯への支援)

- ・障害のある子供と健常者の子供の関わり方について、小さい頃からハンディキャップをどう捉えるかを学ばせることが大切である。障害を個性として受け入れる寛容な心を醸成する教育環境をつくることが大切ではないか。
- ・経済格差が学力格差に繋がっていることを感じるので、貧困層の子供たちにも目を向け、社会全体で対応する必要がある。

(道徳・情操教育の推進)

- ・美術教育は感性の教育である。それぞれの年代で感性は違い、それぞれ素晴らしい感性を持っている。日本の工芸・美や歴史について研究熱心な人は勉強家で、経済力もあり、非常に礼儀正しい。
- ・芸術は、自分が作品をつくる側にいなくても人生を楽しむために役に立つ。また、お金がなくても人生を楽しむための方法として文化はある。芸術に限らずあらゆる文化にアクセスできる機会を平等に整えるべきではないか。
- ・子供たちのエンパシー(人の気持ちを思いやること)を育むため、実体験を伴って見て分かるようなカリキュラムや手法を学校や家庭に提供できないか。また、会津若松市(「あいづっこ宣言」)や、福島県(「NN運動」)のように、子供たちがとるべき行動5～7項目を公募して作成してはどうか。

(音読等の充実)

- ・音読は、韻律をリズムで体得でき、その意味も理解できていくなど効果が大きい。また、読書は人生観や世界観を広げることができ、子供たちの対人関係を築く上で良いと感じる。子供の頃から、音読によるコミュニケーションを図ることで、言葉の意味や大切さを知っていくことは貴重な経験である。より多くの学校で採り入れて欲しい。

第3・4回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会の意見

「才徳兼備」に関する意見

才徳兼備の考え方に関する意見

本県の教育理念である『「有徳の人」の育成』をより具体化した言葉として、「才徳兼備」という言葉が適切ではないか。人の魅力や信望は「徳」の面で大きな影響を持つ。「才」だけではなく「徳」、言い換えれば人間性を養うことが必要である。(矢野委員長)

「有徳の人」は方向性を示す概念である一方、「才徳兼備」は矢印のイメージであり、その矢印において「才」は長さ、太さなどの形を表し、「徳」はその向きを示すものである。子供たちが「徳」を身に付けるためには、世界を知る、歴史を振り返る、未来を見据える、ことの3つのポイントから「自分は何者なのか」という自己認識を打ち立てることが大切である。(池上副委員長)

才徳兼備の人材を育む教育に関する意見

「未来を切り拓く Dream 授業」は、子供たちや親の2カ月後の感想を見ると、学習内容やモチベーション等の面で効果が高く、「才徳」の矢印を大きくさせた事業である。また、参加者からは県の事業であることによる安心感もあった。(池上副委員長)

勉強はやりたい仕事に向けてすべきであり、得意なことや好きなことに人生のチャンスがあるので、小学校や中学校では子供たち一人一人の得意なことに気付かせてあげる教育が大切である。(山本委員)

高校2、3年生を県内の大学で聴講生として受け入れて、興味のある授業の単位を認めるシステムがあれば、生徒たちが大学を選ぶ時にその大学への進学の手助けになり、県外大学への流出も防げる。(マリ委員)

インターネット等を活用した単位の取り方や勉強の仕方など、生徒の才能を伸ばすことができるような扉をたくさん作り、自分の住んでいる地域と世界が繋がるような仕組みがあればよいのではないかと。(マリ委員)

大学側に年齢、組織、立場を超えて受け入れる環境が必要ではないか。また、子供たち自身にもそうした世界に飛び込んでボーダーを取り払っていく行動力が必要ではないか。(埴委員)

将来の姿が不明瞭なまま、偏差値の高い大学へ入るために、記憶する勉強に注力している高校生が多いが、これからは自分の言葉で議論や説明ができる人が望まれている。(杉委員)

論点1：学びを支える地域に根ざした学校づくりの推進

地域学校協働本部やコミュニティスクールの導入等に関する意見

ニーズのないことを学校が行うことにならないよう学校運営協議会が「Plan」、地域学校協働本部が「Do」の関係で、両者が常に協議をして実行していくサイクルをつくる必要がある。(竹原委員)

地域学校協働本部の設置やコミュニティスクール等の制度は、これまであった地域全体で人をつくるという文化を仕組みにしたことであり、制度化することで、継続性を高めることである。(竹原委員)

制度として導入すると学校側の負担が増すように思われるが、役割を分担してコーディネーターが機能していくと、みんなで協議した結論を実行していくので、むしろ学校側の負担感が減る。(竹原委員)

これらの制度をさらに推進する上で、学校教育と社会教育、学校教育と福祉部門など、行政の縦割りを繋ぐような仕組み、学校のマネジメントに合った動きができるような委員の選定が課題である。(竹原委員)

私学は地域と学校に垣根がある。そのため、学校行事の中に地域を取り込むだけではなく、地域清掃や祭りなど地域の行事に学校が積極的に出かけて交流を行う。人間関係を学んだり、築き上げたりするには、地域の活動に積極的に参加し、交流することが大切ではないか。(埴委員)

地域と学校との連携に関する意見

子供たちも社会の一員という視点から、例えば後継者不足により技術の継承が危ぶまれている地元の農業の今後について、大人だけではなく子供たちと一緒に考えていくことで、社会の問題点を共有することができる。また、子供たちは社会貢献、人助けの意識が芽生えることで「徳」を積むことができるのではないか。(片野委員)

人生の成果は考え方、能力、情熱の掛け算だと言われるが、このうち考え方がどれだけ研ぎ澄まされているかが大切であり、これは大学(座学)以外で身につくものである。このため、例えばボランティアや旅行など、様々な経験が単位になるようプログラム化し、社会に出て分かることが学べるようにすればよい。(藤田委員)

県では、「社会総がかりで取り組む教育」を大綱の中にも掲げ推進しており、そのことは教育関係者を中心に知られているものの、地域レベルではまだまだ知られていないと感じる。このため、例えば経済、スポーツ等の県内各界や自治会関係者の集まりなど、様々な機会を活用して県の取組を広く伝え、多くの県民が教育に関わってもらうようにしていくのがよい。(杉委員)

地域の実情を踏まえた魅力ある高等学校の実現に関する意見

スポーツ学科を設置するに当たっては、静岡県は広いので、自宅通学とした場合、トレーニングと栄養、休養面における親の関わり方の観点から、県内の地域バランスが重要である。また、スポーツ科と体育科ではかなり印象が違ってくるので、しっかり検討した上で、世界レベルの施設を揃えて17歳で世界やプロで活躍できる子供を輩出できる静岡県独自のものをつくってはどうか。(山本委員)

専門知識等を有する人材の学校教育での活用拡大に関する意見

子供たちに多様な学びの機会を提供する視点から、学校側のニーズを掘り起こす取組を進めるのがよい。また、学校側の負担軽減のため、地域コーディネーターと連携して地域の人材を探し、繋がりを持つことで、子供たちにより実りある学びの機会をつくっていけないのではないか。(池上副委員長)

外部の方々が教育に関わる際、その人のスキルや経験値、学校のニーズに合わせる以外に、子供の年齢やレベルを理解しながら教えられるよう研修を行う必要があるのではないか。また、教師のパートナーとして協働的に教育に関わるマインドも気にしながら進めていくとよい。(竹原委員)

(公財)産業雇用安定センターにキャリア人材バンクがある。生徒に技術を教えることは想定されていないが、外部人材として活用できるようにすれば、工業高校等の学校現場の需要に応えられるのではないか。(杉委員)

スポーツ人材バンクの充実に関する意見

指導者を登録する際の基準が厳し過ぎるのではないかと意見があった。そうした視点からも登録者数を増やすための方法を考えていく必要があるのではないか。(矢野委員長)

より多くの人材に登録及び活躍してもらうため、人材バンクに登録するメリットや既に活躍している指導者のロールモデル、好事例をホームページやパンフレット等で示すなど、制度の周知に取り組む必要があるのではないか。(池上副委員長)

サッカー指導者のライセンス制度のように、教師も段階的に成長してもらう必要がある。子供の能力を最大限に引き出せる指導者がよい指導者という観点から、豊富な知識があっても子供たちに伝えられなければ意味がない。子供たちの心を掴むために教師も成長できる仕組みが必要であり、ステップアップするためのリフレッシュ研修や、専門性を高めることができる研修などがあればよいのではないかと。(山本委員)

中学時代に才能があるのにも関わらず、専門的指導者がいないために、その才能を伸ばしてあげられない環境があることは問題である。中学校部活をレベルアップさせていくために、中学生のタレント発掘と育成、それを維持する仕組みをモデル校などで行なってはどうか。(山本委員)

静岡型ホストファミリー制度の構築に関する意見

留学生を受け入れる際、留学期間を通して家庭に滞在させるホームステイでは、ホストファミリーの負担が大きい。とくに大学生であれば、生活の面倒まで見る必要はないので、盆や正月など、年間を通じて様々な行事の際にのみ受け入れることでホスト側の負担感を減らし、留学生に静岡のファンとなってもらえるような、本県独自のホストファミリー制度が構築できるとよい。(矢野委員長)

買い物や食事などの交流を切り口に、ホームステイに対するハードルを低くし、より多くの県民が外国人と触れ合う機会をつくるため、外国人留学生等を受け入れることが可能な家庭の登録制度を考えてみてはどうか。(矢野委員長)

最近では、特にアジア各国から日本へ農業・工業・芸術など様々な分野で留学希望が多いが、本県には多岐に渡って特色のある学校がたくさんある。留学生の受け入れには必ずしも国際化した特別な環境を必要としない。(加藤委員)

意識の高い留学生が一人でも学校の中に入ると化学反応を起こし、日本人生徒は影響を受けて変わっていくので、留学生を受け入れた方がメリットは大きい。例えば1市、1町、1家庭ずつ毎年受け入れていくような制度や仕組みがあればさらに国際化していくのではないかと。(加藤委員)

論点2：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

マイノリティとの共生意識の醸成に関する意見

最近では、人間関係を構築できない子供が増えている。生徒指導上の問題が起きた場合、生徒個々の情報の共有は非常に大切である。(埴委員)

障害のある子供と健常者の子供の関わり方について、小さい頃からハンディキャップをどう捉えるかを学ばせることが大切である。例えば、小学校低学年で特別支援学校の子供たちと農業体験や運動会など、お互いの個性を認め合えるような場をつくることで、大人になっても違和感なく接することができるようになる。障害を個性として受け入れる寛容な心を醸成する教育環境をつくるのが大切ではないかと。(片野委員)

貧困世帯への支援に関する意見

経済格差は学力格差に繋がっていること、また、生活困窮世帯が増加していることを実感している。貧困層の子供たちにも目を向け、社会全体で対応する必要がある。(埴委員)

道徳・情操教育の推進に関する意見

美術教育でいうと、日本は学問的で堅苦しい授業が多い。本来は感性の教育である。それぞれの年代で感性は違い、それぞれ素晴らしい感性を持っている。美術教育も個々の感性に基づいた一つの形を開発していかなければ難しい。展覧会の解説も個々の感性を引き出す言葉の使い方など、新しいやり方が必要であると感じる。(渡邊委員)

ゲームをきっかけとして本物の刀剣を目当てに全国からたくさんの人が美術館に来館するが、そういった人達の多くは刀剣から始まり、日本の工芸・美や歴史について研究熱心な勉強家で経済力もあり、非常に礼儀正しい。(渡邊委員)

芸術は、自分が作品をつくる側にいなくても人生を楽しむために役に立つ。また、お金がなくても人生を楽しむための方法として文化はある。芸術に限らずあらゆる文化にアクセスできる機会を平等に整えるべきではないか。(宮城委員)

子供たちのエンパシー(人の気持ちを思いやること)を育むためには家庭での教育が大切であるが、褒める言葉と悪口を浴びた植物ではその後の生育に違いが出るといった、実体験を伴って見て分かるようなカリキュラムや手法を学校や家庭に提供できればよいのではないか。(マリ委員)

会津若松市の「仕の掟」の現代版「あいづっこ宣言」や、福島県の「ならぬものはならぬものです」を引用した「NN運動」のようなものを県内で幼少期から小学校低学年の時期に実施できないか。内容を押し付けるのではなく、県内から5～7項目を公募して作成してはどうか。(杉委員)

音読等の充実に関する意見

音読は、子供たちが韻律をリズムで体得するところから、その意味も理解することにつながっていくもので、その意味で対象は古典が適していると考えられる。少しでも多くの学校で音読を採り入れて欲しい。(矢野委員長)

読書は人生観や世界観を広げることができるので、「読書の時間」の中で、音読や朗読を選択肢として取り入れてはどうか。(池上副委員長)

音読は、子供たちの対人関係を築く上でよいと感じる。子供の頃から同じ空間を共有して、音読によるコミュニケーションを図ることで、言葉の意味や大切さを知っていくことは貴重な経験である。(池上副委員長)